心理学シリーズ　S.フロイト編　＜最終回＞

２００６．１．１５　　タツノオトシゴ

年も変わり、心理学シリーズも 10 回目を数えることが出来ました。
自分の身近な部分から、何かが少しは見えてきます。まさに「継続は力なり」です。
大学院の方も、いよいよ最終年度の追い込みです。思い返せば願書を書きながらの合間を縫って、又レポートの締め切りを気にしながら、あるいは夏休みの合宿中に、そして今は修了論文との競争の慌しい中での作業です。自分のモチベーションを高めるには、丁度良い時間を過ごせたのではないかと思います。さて今年はライ君の年、何か良い事がありそうな予感がします。“いろはかるた”の一番目を期待しています。(^^;)

人間の感覚の中では、視覚から入ってくる情報が約８割あります。残りの２割が聴覚や嗅覚、触覚その多機能です。外部からの刺激で脳が反応し、同じことの繰り返しの中で必要な部分が長期記憶化されていくのです。同じものを見たり聞いたりしても、受け取る人が違うと反応が違うように、一人一人の人格も経験の違いによって形成されていくのでしょう。芸術の世界でも、同じ作品から受ける印象や感銘も違います。受け取る人の状況や年齢も作用しています。そのような事から、人格テストや性格判断などが可能となり、統計処理されているように思います。フロイトが芸術に興味を示したのは、人の心の中（深層心理）を覗く窓として有用な要素を見出したからなのでしょう。

前回の DOKUGAKU では、“矢澤さん(大きな数)”と“うさおさん(水引き)”の二つの写真が面白い効果を出しています。今までとは一味違う、「十七文字の抒情詩」にもつながる世界です。“心理学シリーズ＜その４＞”では、今までと違う写真を入れていますが、やはり違和感が残りました。（その理由は、謎のまま？･･･としておきます）
という訳で、今年の最初の写真は何でしょう？何気なく、見過ごしてしまいそうな情景ですが、その背後には謎が隠されています。（ヒント：題してトルネード）

S.フロイトがこの世を去ったのは 1939 年 9 月 23 日でした。（上顎口蓋の癌でした）ロンドンに亡命する直前に『モーゼと一神教』を書き、亡命後に『精神分析学概説』を執筆しています。晩年のフロイトは、思弁的な傾向が著しかったようです。フロイトの周りには前回のシリーズ、C.G.ユングを初めとして多くの心理学者が係わっています。ユングとの出会いが、「精神分析がユダヤ人のものだけではなく、世界のものになった」とも言わしめるほどですが、他にも多くの人物との接点があります。オーストリアの精神科医、J.ブロイアーはフロイトの先輩にあたります。その患者、『アンナ･O(仮称)』からフロイトは多くのものを学びました。彼女の本名は、ベルタ･パッペンハイムと言い、裕福なユダヤ人家庭に生まれました。種々のヒステリー症状を持っていましたが、ブロイアーに会うと心に溜まっているものを、次々と話すことで上機嫌になりました。彼女は、この治療を「談話療法」とか、冗談に「煙突掃除」と名づけたりしています。その後、彼女は回復して、ヨーロッパで最初のソーシャルワーカーとして活躍するのでした。タツノオトシゴは“chimney sweeping”と聞くと、『メリーポピンズ』の中の歌を思い出します。ジュリー･アンドリュースが主演した楽しいミュージカルでしたネ！一方のブロイアーは、『ヒステリー研究』をフロイトと共著で出版しますが、“性”に対するフロイトの大胆な研究態度に付いて行けず、決別してしまいます。

C.G.ユングと S.フロイトの関係は､前のシリーズで触れているように 1913 年の決別後、違う道を歩んでいきます。それより 2 年前の 1911 年にフロイトは、個人心理学者の A.アドラーと決別しています。A.アドラーはフロイトと同時代の人で、ウイーン大学医学部を卒業後､内科医として開業しています｡初めはフロイトの信奉者の一人でしたが、

フロイトの理論を「原因論」であると非難し、「目的論」的に考えるべきであると主張しています。アドラーの個人心理学で重要視されたのは「劣等感」で、劣等感から生じる“優越性への欲求”が人の心や成長に大きな影響を与えていると考えています。フロイトの『補償』の考えにも近い部分がありそうです。S.フロイトが親子関係を重視したのに対し、アドラーは兄弟関係に着目しています。優秀な兄や姉を持つと、弟や妹は劣等感を抱き、それをバネにして努力する事が大きく作用するというのです。（別に兄や姉が優秀でなくとも、次男･次女の方が要領よく生きている気もしますが･･･）
アドラーの個人心理学は、性欲よりも征服欲や支配欲の方が人間の行動に強く作用するとし、本質的には楽観主義である部分が現代社会には受け入れられ易いのでしょう。
　C.G.ユングが、歴史的背景や伝統に着目し、心の奥底(無意識の領域)へと踏み込んでいったのとは対照的に、S.フロイトは、あくまでも人間を対象として研究を重ねる中で芸術や宗教にも分野を広げていったのです。二人の出会いが、心理学に及ぼした影響は計り知れません。

S.フロイトは、後年になってからは“無意識の働き”よりも“自我の防衛メカニズム”の研究に力を注いでいます。６人の子どものうち、末娘の A.フロイトは父の後継者として“防衛機制(適応規制)”についての働きを体系化しています。フロイトが亡命するまでのウイーンは精神分析の中心地でしたが、後に多くの学者がアメリカに亡命し、その中でも H.ハルトマンは防衛メカニズムを「自我心理学」とし体系化させています。自我心理学によれば、“自我”は受身的な存在ではなく、自律した存在であり、人格の統合や環境に適用させたりする、人格の連続性に不可欠なものです。そして“自我”の

発達過程に注目したのが E.エリクソンでした。後に、「アイデンティティ」や「モラトリアム」という概念を提唱し有名になりますが、A.フロイトから児童心理学についての影響を受けていることも見逃せません。

秋の紅葉は、まさに植物が“自我”を主張しているように見えます。緑の葉が、赤や黄色に色づく季節、今回も桜の紅葉を大阪よりお届けします。(^_^)

その後いくつかの学派が生まれ、アメリカやイギリスにて発展していきます。
フロイトの理論を継承し発展させていった自我心理学に対し、フロイトの理論を部分的に批判し体系化したのが、“新フロイト派”といわれる学派でした。社会が心に与える影響を重視し、アドラーの影響を多く受けているのも何かの縁でしょう。

では、又お会いできる日を楽しみに・・・